

多摩川河口で越冬するシギ・チドリ類

桑 原 和 之

Kazuyuki KUWABARA: Note on Wintering Waders at the Mouth of
Tama-River, Central Houshu.

Abstract: From December 1985 to March 1986, Kentish plover *Charadrius alexandrinus*, Ringed Plover *Charadrius hiaticula* and Dunlin *Calidris alpina* were wintering at the mouth of Tama-River (35° 32' N, 139° 45' E). Dunlin was dominant in wintering season at this tidal flat. About fifty number of Kentish plover were wintering, but Ringed plover occurred in a few numbers.

はじめに

多摩川河口は、東京湾内でも有数の、水鳥渡来地であり、1990年までに、156種の野鳥が記録されている(箕輪ほか, 1991)。しかし、水鳥に関する研究は数少なく、シギ・チドリに関しての、黒田, 1919, カモメ類に関しての桑原ほか, 1988などの報告があるにすぎない。著者は、越冬期に多摩川河口の干潟でシギ・チドリ類を調査する機会を得たので報告する。

調査地および調査方法

調査は、多摩川河口 (35°32'N, 139°45'E) で行った。調査範囲は、東京都と神奈川県境にかかる大師大橋から下流にかけて形成される干潟である (Fig. 1, Fig. 2)。泥質の干潟が干潮時に、河口の両岸に形成される。中州の周囲にも干潟がみられ、シギ・チドリ類の他にもカモ類・カモメ類・サギ類などの水鳥が採食する。調査に際しては調査範囲の全てのシギ・チドリ類の個体数を30倍の望遠鏡を用い数えた。計数の際には、シギ・チドリ類の行動・採食場所などにも留意した。また、1986年3月11日にシギ・チドリおよびカモメ類の分布調査も行った。

調査は、1985年12月~1986年3月の期間に5回行った。調査日は、1985年12月27日、1986年1月22日・24日、2月24日、3月11日の5日間である。調査は、干潟が干出する干潮時に行うように心がけたが、1986年

1月22日のみ満潮時に調査を行った。総観察時間は、410分で、1回の調査時間の平均は、82分である。

結果および考察

調査期間中に、ハジロコチドリ *Charadrius hiaticula*、シロチドリ *Charadrius alexandrinus*、ハマシギ *Calidris alpina* の3種が記録された。最も個体数の多く観察された種は、ハマシギであり、289~346羽が記録された (Table 1)。ハマシギの個体数の平均は、319.6羽で比較的安定していたのに対し、シロチドリの個体数はかなり変動した。1985年12月27日にシロチドリは129羽記録されたが、1986年1月22日には満潮のため個体数が少なく5羽しか記録されなかった。1月~2月の厳冬期のシロチドリの個体数は少なく50羽以下であったが、3月には最多数の183羽が記録された。ハジロコチドリは、1986年1月24日に、冬羽1羽、3月11日には、冬羽1羽と冬羽から夏羽へ換羽中の1羽が記録されただけであった。

観察されたこれらのシギ・チドリ類のほとんどが、干潟を採食の場所として利用していた。おのおのの種が、採食していた割合は、ハジロコチドリが100% (N=3)、シロチドリが100% (N=381)、ハマシギが81.2% (N=1598) であった。

また、採食場所は、カモメ類が比較的少ない所であった (Fig. 3)。ハマシギとシロチドリの採食場所の差は、明確ではなかったが、2種とも、セグロカモメ *Larus argentatus* やカモメ *L. canus* などのカモメ類が休息している干潟付近では余り採食している個体は少なくカモメ類の少ない干潟面を多くの個体が利用して採食していた。

調査期間中に、シギ・チドリ類は上述の3種しか記録されなかった。東京湾内の千葉県木更津市小櫃川河口や千葉県富津市富津岬、千葉県習志野市谷津干潟などで普通に越冬するダイゼン *Pluvialis squatarola* な



Fig. 1. View of Study area on 22nd July, 1991.



Fig. 2. View of Study area on 22nd July, 1991.

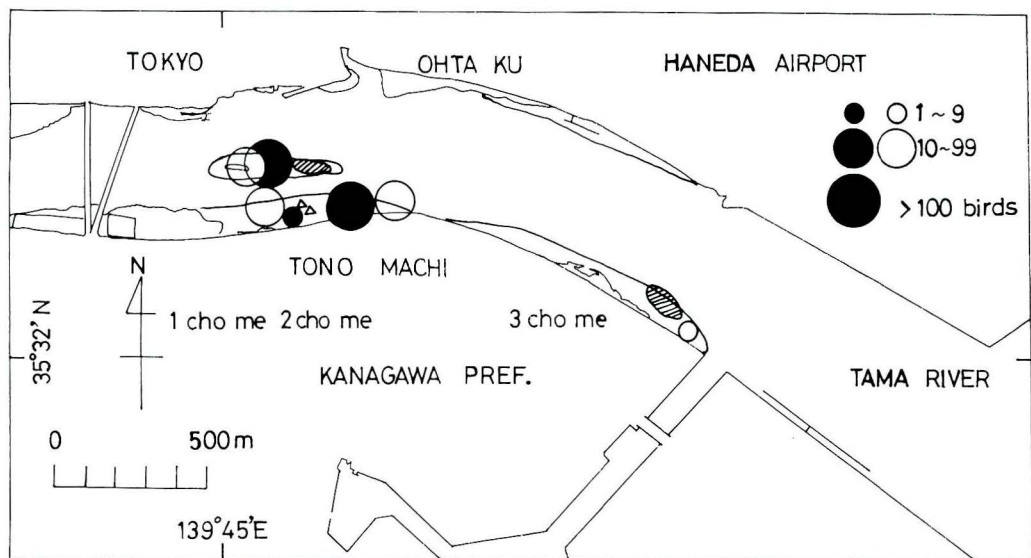


Fig. 3. Distribution of waders and gulls on 11th March, 1986.

Map to show sites where waders has been observed from 11:45 to 13:00 on Low tide. ● denotes Dunlin *Calidris alpina*, ○ denotes Kentish plover *Charadrius alexandrinus*, △ Ringed plover *Charadrius hiaticula*, shaded area denotes roosting flock of gull, (*Larus* spp.). Size of symbol varies according to the number of waders. See distribution of waders, there are few waders at where gulls were roosting.

Species		1985	1986				average
		Dec.	Jan.	Jan.	Feb.	Mar.	
		27	22	24	24	11	
Ringed plover	<i>Charadrius hiaticula</i>	-	-	1	-	2	0.6
Kentish plover	<i>C. alexandrinus</i>	129	5	22	42	183	76.2
Dunlin	<i>Calidris alpina</i>	ca.346	343	289	325	295	319.6
total number		475	348	312	367	480	396.4

Table. 1. Census result of waders at the mouth of Tama-River, from December 1985 to March 1986. Only 3 waders were recognized in this wintering season.

どは確認されなかった。日本野鳥の会神奈川県支部、1986でもダイゼンの越冬は確認されていない。冬期に干出する干潟面積が少ない多摩川河口でダイゼンが越冬しなかったことから、ダイゼンの越冬場所は広い干潟であるのかもしれない。また、調査期間中にイソシギ *Tringa hypoleucos* も記録されなかった。河川でイソシギは、普通にみられ多摩川中流では普通に越冬するが、多摩川河口の干潟での越冬記録はない（箕輪

ほか、1991）。つまり、河口域の開けた干潟はイソシギが越冬するには適していないのかもしれない。イソシギやダイゼンなどの越冬場所については、今後も新しい調査が必要である。

東京湾内で、百羽を越えるハマシギが越冬できる干潟は数少なく、自然の干潟としては、小櫃川河口、富津岬、谷津干潟だけであり越冬個体数に関しては東京湾内では前三者に次ぐ越冬場所と思われる（岩瀬・桑

原, 1989)。1970年代から1980年代にかけて、東京湾内の干潟から急激に個体数が減少しているシロチドリも、数十羽が越冬していた。ハマシギに比べ、シロチドリは分散して採食するため、その個体数の把握は難しい。しかし、ハマシギと同様に、広い干潟では越冬個体数は多い。従って、東京湾内の干潟が数少なくなった現在では、多摩川河口は彼らにとって重要な越冬場所と思われる。また、ハジロコチドリの越冬は、東京湾内では、多摩川河口と小櫃川河口でしか記録されていない(桑原ほか, 1989)。小櫃川河口での越冬例は1例のみである(百瀬・桑原, 1988)。多摩川河口では、1～2羽が近年越冬しており、比較的容易に越冬が確認できる。ハジロコチドリの越冬場所として多摩川河口は重要であろう。

シギ・チドリ類は、各地で減少しており、東京湾岸の干潟の保護が望まれる。多摩川河口は、シギ・チドリ類の越冬場所や採食場所となるだけではなく、彼らの渡りの中継地としても貴重である。東京湾内の干潟面積の減少は、シギ・チドリ類に大きなダメージを与えることになる。干潟では、シギ・チドリ類だけでなく、カモメ類の個体数も多い。現在、東京湾内では、ユリカモメなどのカモメ類の個体数は増加していると考えられる。多摩川河口などで餌づけなどを行うと、カモメ類が増加すると考えられる。

1986年3月11日の調査などからも、カモメ類が多い場所には、シギ・チドリ類は少ない傾向があり、カモメ類がシギ・チドリ類にインパクトを与えていることはまちがいない。このことから、シギ・チドリ類の採食場所の保護のためにも、干潟の保全保護にはカモメ類の個体数を急激に増加させないよう生ゴミをなるべく

河川に流さないようにしたり餌づけをしないようにするなどの我々の努力も必要であろう。

謝辞：本稿の作成にあたって、神奈川県立博物館の中村一恵氏には、原稿を読んでいただいた。東邦大学の中山聖子氏には、資料をまとめていただいた。ここに、深く感謝の意を表したい。

参考文献

- 岩瀬 徹・桑原和之, 1989. 東京湾の自然の豊庫小櫃川河口, 自然保護, (328): 18-19.
- 黒田長禮, 1919. 六郷川河口に於ける鴨, 千鳥類の「渡り」. 62pp. 日本鳥学会.
- 桑原和之・小林美奈子・鈴木康之, 1988. 多摩川河口におけるカモメ類について(1985年4月—1986年3月). *J. Yamashina Inst. Ornithol.* 20: 37-40.
- 桑原和之・時国公政・鳥木 茂・永田敬志, 1989. ハジロコチドリ *Charadris hiaticula* の越冬記録. *Bull. JBBA.* (4): 81-89.
- 箕輪義隆・嶋田哲郎・桑原和之・杉坂学・鈴木康之, 1991. 多摩川河口鳥類目録. 神奈川自然誌資料(12): 1-15.
- 百瀬邦和・桑原和之, 1988. 小櫃川河口の鳥類目録. 千葉生誌(37): 80-90.
- 日本野鳥の会神奈川支部, 1986. 神奈川の鳥1977～86. 神奈川県鳥類目録. 218pp. 日本野鳥の会神奈川支部, 横浜.

(千葉県立中央博物館)